

# 福祉施設にちぎり絵サークル

## ロータス音更 利用者制作通じ交流

【音更】介護老人福祉施設ロータス音更（町中鈴蘭元町2、多田文明施設長）にちぎり絵サークルが発足した。デイサービスの利用者がボランティアの助けを借りながら、楽しく作品作りに取り組んでおり、交流が進んでいる。



手作りの看板を手にするちぎり絵サークルの会員ら。前列中央は講師の飯塚さん

ボランティアでちぎり絵を指導しているのは、帯広市内在住の飯塚節子さん（70）。型抜きパンチで小さな馬の形に切り抜いたチラシや新聞紙の紙片を貼り合わせる手法で作品を作る。自身の制作活動の傍ら、10年ほど前から市内の福祉施設に出向き、ボランティアでちぎり絵を教えている。

ロータス音更生活相談員の大橋裕子さん（42）が3月、藤丸で開かれた飯塚さんの切り絵展会場を訪れ、その作風や人柄に感銘。ボランティア活動を依頼し、飯塚さんが快諾した。

活動は5月に利用者5人でスタート。現在は第1・第3金曜の午後に1時間活動しており、会員は8人に増えた。サークル名は会員が意見を出し合い、温かくなじみやすい名前として

「ひだまり」に決め、約10日間かけて看板を手作りした。

現在は利用者が金魚や季節の花をテーマに個々に作品作りに取り組んでいる。飯塚さんは作品を褒めたり、時には冗談を言ったりして、会員らのやる気や自主性をうまく引き出す。

飯塚さんは「皆さん明るくて、吸い込まれるような感じ。私自身、会員から勇気をもらっている」と話す。秋には会員共同で紙芝居を作り、近くの鈴蘭保育園の子どもたちに披露する計画もある。

会員で町内在住の利用者下坂富美子さん（86）は「飯塚さんに教えてもらいながら配色を決めるのが楽しい。もともと指を使うことは好きだったので、指先の運動にもなる」と話す。

活動の狙いについて、大橋さんは「単なる作業で終わるのではなく、活動を通して地域とのつながりができればいい。作品作りを励むことで、日々活気を持って施設に通ってもらえれば」と話している。

（鈴木裕之）